

【5】 都城地区小学校体育連盟（学校数42校、児童数 13,174 人）

I 年間事業

月 日	曜	会場	会の名称	主 な 内 容	
				研究部	事業部
5月10日	火	早水文化センター	教科主任会	○役員選出 ○研究推進	○水泳記録会の計画
5月31日	火	早水文化センター	第1回 常任理事会	○計画・組織 ○研究の方向性	○水泳記録の提案
6～9月中		各学校	各学校における水泳記録会		
7月26日	火	早水文化センター	第2回 常任理事会	○指導案検討	○水泳記録の集約 ○陸上運動教室計画検討
8月4日	木	明和小学校	地区別 講習会	○実技講習会	
9月13日	火	早水文化センター	第3回 常任理事会	○指導案検討	○陸上運動教室計画確認
10月11日	火	早水文化センター	第1回 理事会	○指導案検討	○陸上運動教室選手名簿 確認、前日・当日準備の 確認
9月～11月		各学校	各学校における陸上記録会		
11月30日	水	西小学校	都城市・三股町合同教育研究会：領域：ボール運動 (小・中・高合同教育研究会を兼ねる)		
2月14日	火	早水文化センター	第4回 常任理事会	○次年度研究の方向性 検討	○事業報告、決算報告準備 ○次年度事業計画検討 ○次年度組織編制
2月28日	火	早水文化センター	第2回 理事会	○次年度研究の方向性 提案	○事業経過報告、決算報告 ○事業反省 ○次年度事業計画

II 事業部のあゆみ

1 各学校による水泳記録会(6～9月中)

(1) 対象 小学5・6年生

(2) 実施種目 25m(自由形・平泳ぎ)、50m(自由形・平泳ぎ)

※ 実施可能な学校のみ、記録会を行った。

※ 5年生は、50mの種目は行わなくてもよいこととする。

2 各学校による陸上記録会(9～11月中)

(1) 対象 小学5・6年生

(2) 実施種目 50mハードル、ソフトボール投げ、長距離走(男子1000m、女子800m)

Ⅲ 研究部のあゆみ

1 研究主題・副題

主体的・対話的で深い学びを実現する体育科学習の在り方
～ボール運動における指導の工夫を通して～

2 主題設定の理由

学習指導要領において、子供たちが、学習した内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進することが求められている。また、「陣地を取り合うゲームを取り扱うものとする」ことが新たに「内容の取扱い」に示されたが、「タグラグビー」や「フラッグフットボール」のゲームを知らなかったり、指導方法が分からなかったりする状況がある。さらに昨年度、県学校体育研究会を行った際、県の研究として、「ゴール型」について研究に取り組んだ。昨年度研究だけでは「ボール運動」の指導の工夫について課題が見られた。

以上のことから、ボール運動の学習に視点を当て、主体的・対話的で深い学びを実現するための体育科学習の指導について研究を進めることにした。

3 研究の内容

- (1) 児童が主体的に活動できる指導と評価の計画
- (2) 「ボール運動」の指導方法の工夫

4 研究の実際

令和4年11月30日(水)に「都城地区小・中・高合同体育研究会」で授業実践を行った。

領域	単元名	学年	授業者
ゲーム	ボール運動「フラッグフットボール」	第6学年	都城西小学校:井手 省吾 教諭

(1) 児童が主体的に活動できる指導と評価の計画

ボール運動で児童が主体的に活動できるように指導と評価の計画を工夫した。【表1】単元の前半では、「ボールを持っている時の動き」と「ボールを持っていない時の動き」の技能面を重視した授業を行い、単元の後半では、作戦、ルールの工夫といった思考力・判断力・表現力を重視した単元の流れにすることで、意欲的に運動に親しむことができるように計画した。

時	1	2	3	4	5	6(準備)	7	8
指導内容	1.知識 「フラッグフットボールの動き」	2.技能 「ボールを持っていない時の動き」	3.技能 「ボールを持っていない時の動き」	4.技能 「ボールを持っていない時の動き」	1.技・術 「ボールの上へ」	2.技・術 「動き方の上へ」	3.技・術 「動き方の上へ」	4.技・術 「動き方の上へ」
学習過程	4.観察・安全 「場や道具の安全」	1.学習目的 「楽しんで取り組む」	2.学習内容 「準備や付け」	3.学習内容 「準備や付け」	4.学習内容 「準備や付け」	5.学習内容 「準備や付け」	6.学習内容 「準備や付け」	7.学習内容 「準備や付け」
評価	1.知識 「(ICT)」	2.技能 「(観察・ICT)」	3.技能 「(観察・ICT)」	4.技能 「(観察・ICT)」	5.技・術 「(観察・ICT)」	6.技・術 「(観察・ICT)」	7.技・術 「(ICT)」	8.技・術 「(観察)」
準備物	フラッグ、ベルト、ボール、大型テレビ、ホワイトボード、ボールを置いた標識線、コーン、タブレット端末。							

【表1】 指導と評価の計画

また、単元を通してのゲームで「3対2」の攻撃の人数が多い形で行うことで、攻撃しやすく、点数を取る事の難易度を下げることができ、意欲的にゲームに取り組めるようにした。

本時(第6時)では、コートを広さを工夫したり、スタートの仕方を工夫したりしながら、意欲的に活動に取り組む姿が見られた。



(2) 指導方法の工夫

ア 「努力を要する児童」に対しての手立て

児童の姿に対する手立ての一体化表を作成した。【表2】授業での児童の評価を判断できるようにA(十分満足)B(おおむね良好)C(努力を要する)の基準とC(努力を要する)児童への手立てを表にまとめ、教師が毎時間の授業で評価・指導しやすくなるようにした。

昨年度中学年を作成したので、今年度は高学年を作成した。

小学体育教科 評価基準表 【高学年 ゲーム】

評価内容	「十分に満足できる」状況 (A)	「おおむね満足できる」状況 (B)	「努力を要する」状況 (C)	Cの評価に対する手立て
知識	ゲームのルールや攻撃の基本的な動きが理解できている。	ゲームのルールや攻撃の基本的な動きが理解できている。	ゲームのルールや攻撃の基本的な動きが理解できていない。	基本事項を繰り返し練習させる。スコアボードを用いて攻撃が理解しやすくなるように工夫する。
技能	特定の状況下でボールを運ぶ動作が正確に行える。	特定の状況下でボールを運ぶ動作が正確に行える。	特定の状況下でボールを運ぶ動作が正確に行えない。	ボールの運ぶ動作を、一対一の状況で練習できるように工夫する。
態度	特定の状況下でボールを運ぶ動作が正確に行える。	特定の状況下でボールを運ぶ動作が正確に行える。	特定の状況下でボールを運ぶ動作が正確に行えない。	スコアボードが正確に記録できるように工夫する。ゲームを繰り返すことで、特定のゲームを楽しむことができるように工夫する。

【表2】 評価基準表

イ 目標を達成するためのICT機器の活用

授業の目標を達成するための ICT 機器を効果的・効率的に活用できる方法を実践していくこととした。

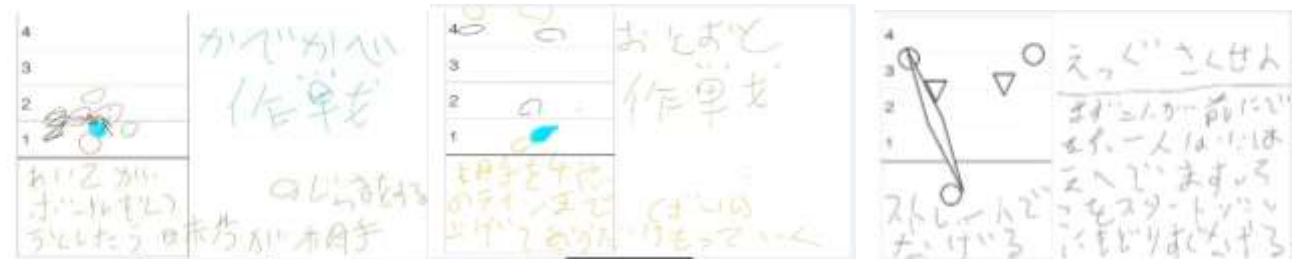
① Jam board を使った作戦会議

作戦タイムの時間に「Jam board」を使い、作戦会議をした。それぞれの動きを矢印で書いたり、動き方を書いたりした。毎時間、チームごとに作戦を積み重ねていくことで、ゲームの前の作戦立案の場面で主体的に作戦を立案ができた。また、上手にできなかった作戦を修正しやすくなった。そして、教師側もチームの作戦を把握しやすく、学級での共有をスムーズに行うことができた。



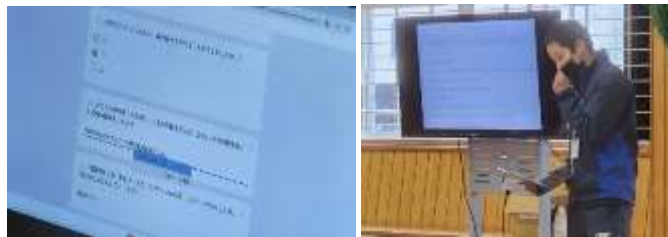
タブレットを使っでの作戦会議の様子

児童が考えた作戦 (Jam board)



② Google フォームを使っでの振り返り

毎時間の振り返りでフォームを使い、めあてに対する振り返りをした。また、次時の最初の前時の振り返りで児童の振り返りを活用した。しかし、児童が前時までの内容を振り返ることができなかつたので、「スプレッドシート」の方が、振り返りの手段として効果的であったのかもしれない。



5 研究の成果と課題

(1) 成果

- 単元の学習計画を工夫することで、児童が主体的に取り組むことができた。
- 児童の姿に対する手立ての一体化表を作成することで、「努力を要する児童」への手立てを取ることができた。
- ICT 機器を使っでの作戦会議や作戦の積み重ねは、話し合いにグループ全員が参加できたり、振り返りができたりするのでとても効果的であった。

(2) 課題

- 低学年の、中・高学年のボール運動につながる運動について、児童の姿に対する手立ての一体化表の作成をする必要がある。
- ICT 機器は活動に合わせて、どのアプリを使うことが効果的・効率的なのか考えて活用する必要がある。

IV まとめ

今年度も、コロナウイルス感染拡大防止の観点から、都城地区は水泳記録会や陸上記録会など、事業運営を進める上で課題が見られた。また、各学校でのコロナウイルス感染拡大防止対策が学校ごとに異なり、水泳記録会や陸上記録会を実施できない学校もあった。次年度は、全学校が実施できるよう、開催時期や運営方法などの工夫をしてきたい。また、研究を進める上でも、全体で集まる機会が取れず、研究部長や授業者の先生の負担が大きかった。しかし、都城地区小体連の課題でもあった、ボール運動の「フラッグフットボール」の研究を進めることができ、小学校をはじめ、中学、高校の先生方からも、「大変参考になった」という言葉をたくさんいただいた。今後も、ボール運動を通して、主体的・対話的で深い学びを実現する体育科学習を意識して、研究を進めていきたい。